女性史の実践がもたらすエンパワーメント

柳原 恵

従来の歴史にはほとんど登場してこなかった女性たちの姿を明らかにしようとする女性史。戦後、全国各地で女性史に取り組むサークルが数多く生まれました。このような女性史サークルの主な担い手は草の根の女性たちでした。彼女たちは祖母や母の埋もれた声をたどり、価値があるものと見なされてこなかった女性の歩みを評価し、歴史として再構成しようと試みました。女性史の中でも、特定の地域を対象としてそこで生きた女性たちの歩みを明らかにするのが地域女性史です。地域女性史を牽引してきた折井美耶子さんによれば、地域女性史は、既存の歴史に欠けていた女性の活動を加えるだけの「つけた史（し）」ではなく、女性やジェンダーの視点からの「書きなお史（し）」を目指します。

なぜ、女性たちは女性史や地域女性史の活動に向かったのでしょうか。全国の女性史サークルが集まった初の研究交流会の記録『女性史の明日をめざして―女性史のつどい報告集なごや』（1977）では、職場や家庭生活において男女の格差に直面したこと、学校で学んだ歴史に女性の姿がないことに疑問をもったこと、携わってきた地域運動や母親運動を歴史の中に位置付けて考えたいと思ったことなどが、その理由として挙げられています。

地域の中で問題関心を共有する仲間がともに集い、学び、調べ、女性史を書いていくことは、さまざまな場面で困難に直面していた当時の女性たち自身のエンパワーメント（力が発揮されることを妨げる要因を取り除くことにより、その人が本来もつ力を引き出すこと）にもつながっていました。女性のエンパワーメントのためには、女性の力の発揮を妨げる女性蔑視や性差別をなくすことが不可欠です。女性たちの営みに価値があるのだと女性自身が再評価し、それを歴史として記す女性史の活動は、女性史に取り組む女性自身のエンパワーメントとなりました。今を生きる私たちも、新しい視座から歴史を掘り起こし、そして自分自身をも書き直していこうとした女性たちの実践に勇気付けられるでしょう。

PROFILE

やなぎわらめぐみ：立命館大学産業社会学部准教授、お茶の水女子大学ジェンダード・イノベーション研究所准教授（兼任）。お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程修了、博士（学術）。専門は、ジェンダー研究、女性史、地域女性史。単著に『〈化外〉のフェミニズム―岩手・麗ら舎読書会の〈おなご〉たち』（ドメス出版, 2018）、共著に『ジェンダー分析で学ぶ 女性史入門』（岩波書店, 2021）など。